

ユビキタスネット社会の実現に向けた政策懇談会基本政策WG（第7回）議事要旨

1 日 時

平成16年11月25日（木） 16時00分から18時00分

2 場 所

総務省4F 401会議室

3 出席者（敬称略）

（1） 構成員

村上輝康（座長）、徳田英幸（座長代理）、伊藤泰彦、大西康昭（高橋秀明構成員代理）、田邊忠夫、福井省三、前田裕、村上篤道、山口光雄、竹田雅弘（渡邊浩之代理）

（2） 総務省

鈴木政策統括官、松井総務審議官、鬼頭技術総括審議官、松井審議官、吉崎総合政策課長、武田情報通信政策課長、今川総合政策課課長補佐、和久屋総合政策課課長補佐

4 議 題

（1） 他のWGにおけるこれまでの議論の概要

事務局より「資料2-1 ICT産業WG（第6回）議事要旨」「資料2-2 これまでの利用環境WGにおける議論の概要」について説明があり、各構成員より以下の意見が出された。

○ ユビキタスネット社会ではICT産業だけでなく、すべての産業に対してインパクトを与えながら融合していくのだという観点を強調すべきだ。

○ 防災や防犯に関する内容は最終報告書のどこに盛り込まれるのか。

（2） 最終報告書の目次と骨子案 ～第一編～

事務局より「資料3 最終報告書－目次と骨子案－」「資料4 最終報告書・第一編関係資料」について説明があり、各構成員より以下の意見が出された。

○ 「欧米依存から独自戦略へ」という表現では日本だけが独立したスタンダードを目指すというような誤解を与える恐れがあるのではないか。言いたいのは欧米に主導権をとられるだけでなく、日本が主導権をとりグローバルスタンダードをつくっていくということだと思ふ。

○ 標準化など他の国に振り回されてしまうのではなく、我々が早めにどんどん提案し、それを例えば独自協調路線というように「独自」という言葉を使って表現してはどうか。

- 日本、アジアからの価値の発信というような言葉で表現するとわかりやすいと思う。また、資料3の3. 1に「モノから情報・サービスへ」、3. 2に「モノからヒトへ」とあるが、別々のところから「モノから〇〇へ」という表現が出てくることに違和感があるので、どちらかの項目に統一して入れてもらいたい。
- ここでは、技術の流出・国内の空洞化により技術的優位が失われるのではないかという漠とした不安を伝えたいだけであると思うが、もう技術が流出してしまっていて弱くなってしまっている部分については特段触れないということか。
- 3. 2の「固定通信から移動通信へ」とあるが、固定通信あつての移動通信であり、「固定通信からIP通信へ、そしてそれを活用した移動通信へ」というような文言にしたほうがよいのではないか。

(3) 最終報告書の目次と骨子案 ～第二編～

事務局より「資料3 最終報告書―目次と骨子案―」「資料5 最終報告書・第二編関係資料」について説明があり、各構成員より以下の意見が出された。

- 夢のある社会と影のある社会を必ずしも対立させる必要はなく、2010年は夢のある社会であり、それを実現するためには影の部分を解消するためのコストや投資が必要である、というロジックを示しておけばよいのではないか。また、今回の試みの出発点の大きな柱が生活者の視点から考えることなので、色々な人を想定した絵を描くことが一番素直で、今回の試みのユニークさが強調できるのではないか。
- 4. 3の「草の根ICT」の「草の根」という表現には草の根運動のようにミクロで自然発生的なことをイメージしてしまうので、説明があったように「生活に融け込んだICT」という言葉のほうがより具体的にわかりやすいのではないか。
- 4. 2に「ICT産業の優位性の持続と国際貢献」とあるが、ユビキタス時代では国際連携が非常に重要になってくると思う。バイオメトリックス認証、一部の決済システムなどそれらが上手く連携し、より多くの人に使われるようになれば日本もフロントランナーになるのではないか。
- ユビキタスの最大の特徴は個人やモノが単独で何かをするのではなく、連携したり、連動したり、つながったりできるということである。「価値の創造」においても「価値の連鎖」や「価値を共創する」というように表現した方がユビキタスらしさを表現できるのではないか。
- ユビキタスのサービスのひとつの特徴は、ある場面でできているサービスが別の環境に移

っても同じようにできることである。だから、2つの場面あるいは3つの場面をシームレスにつないで安心・安全にネットワークやコンテンツなどのサービスにアクセスできる。しかも、端末の形状が変わっても問題なくできる。このように場面がいくつか出てきて、上手く連続しているニュアンスがイラストに出てくるとよい。

- u-Japanのネットワーク上にユビキタスマーケットのようにお互いが連鎖、競争しながら価値を生み出すというイメージが出てきた方がアクティブな感じがする。
- ICTの利用により個と個がぶつかり合って、より上位のレイヤー上で新しい動きが生まれるという意味で、価値の「創発」というのがよいのではないか。
- e-Japanは「知識創発」がキーワードとなっている。u-Japanではそれが進んだインフラの利活用によってより上位のものとなり「知識」から「価値」ということにするのはよいと思うが、「価値」と「創発」をつなげて違和感がないかが気になるところだ。
- 分かりやすさからすると、事務局の説明にあった「草の根ICT」や「生活に溶け込んだ草の根」のように生活に密着した中で、生活に対する価値創造が行われていく、ということではよいのではないかと思う。

(4) 最終報告書の目次と骨子案 ～第三編～

事務局より「資料3 最終報告書―目次と骨子案―」「資料6 最終報告書・第三編関係資料」について説明があり、各構成員より以下の意見が出された。

- 価値創造とはどのようなものか、についてももう少し具体的に補足していただきたい。
- ICTが実際の社会や経済、あるいは生活やビジネスに結びついていくことが重要であるので、それらの間をつなぐ共通的なプラットフォーム整備の実現を盛り込んでもらいたい。
- 課金や認証などの面においてある種の秩序がないとユビキタスネット社会が円滑に機能しないので、それを短時間で達成するような仕掛けが必要不可欠である。
- レベルがミクロになってくると、個々の企業では対応できないので、ビジネスとしてのアグリゲータが現れてサービスとして認証や課金を行うようになり、そこを「ここは安心です」と認定するような大きな機関が必要となるのではないか。
- 現在認証に関しては大きく分けて3つ程度の動きがあり、その中でも一つが認証すればほかは認めるといった話もあるので、そのような動きを報告書に盛り込めばよいのではないだろうか。

- 他産業がICTを取り入れることにより産業が活性化・高度化していく、あるいは医療や教育といった社会システムがICTにより変革が起きるといった部分についてはどこに記述されるのか。特に前者は産業にとって「夢」の部分となるので盛り込んでもらいたい。
- u-Japanによる波及効果をICT産業に限定せず他産業についても紹介してもらいたい。

(5) 最終報告書の目次と骨子案 ～第四編～

事務局より「資料3 最終報告書―目次と骨子案―」について説明があり、各構成員及び事務局より以下の意見が出された。

- 12. 2に「官」は「基礎インフラの基盤整備と「産」へのインセンティブ付与」とあるが、もしキャッシュインセンティブだけではないという意味なのであれば誤解が生まれないう表現に工夫をした方がよい。
- 基本的に民の自由な活動がベースにあり、それで官が行うのは市場原理の全く外か、あるいは市場原理が有効・適切に働くような環境を整えることではないかと考えている。そのように誤解のないように本編に書いていきたい。
- 国内及び国外に対してのu-Japanの普及・啓発はどこに盛り込まれるのか。
- 「民」が主役という観点からすると、「民産学官」の方が適切なのではないか。

(6) 今後のスケジュール

事務局より「資料7 u-Japan政策懇談会総会及び各WGスケジュール」について説明があった。

以上